

おすすめ  
できない本

中井乱人

## おすすめできない本

---

これを信じていけば間違いない、というような指南書がこの世にいくつあるだろうか。僕にとっては「おかしな二人／井上夢人」がまさにそれだ。

ただし、「おかしな二人」は何らかの指南書ではない。乱歩賞作家、岡嶋二人の誕生からプロデビューそして解散までの回想録である。

岡嶋二人は、徳山諄一と井上夢人による日本では珍しいコンビ作家だ。本書は岡嶋二人の執筆担当であった井上氏の視点から、両氏の馴れ初めやコンビで創作するプロセス、業界の裏話までが赤裸々に綴られており、コンビ結成から乱歩賞受賞までが「盛の部」、プロデビューから解散までが「衰の部」という構成になっている。

あなたには、放課後の教室で同級生と話していたら、話が突拍子もない方向に転がり、腹を抱えて笑い転げてしまったような経験がないだろうか。発想が発想を呼び、その連鎖の先は思いもよらぬ場所になっていて、あれ、何でこんな話してたんだっけ？みたいな状況になる、アイデアの応酬。

そんなプリミティブな創造への衝動がこれでもかと詰まっているのが「盛の部」。そして、アマチュアからプロになったことで生まれた苦悩や、コンビを組んでいる相方への不満や衝突がリアルに描かれる「衰の部」。どちらも井上氏の軽妙かつ無駄のない文章で、染み入るように頭にスッと入ってくる。岡嶋二人というコンビが乱歩賞を受賞するまでのサクセスストーリーとしても、相方との軋轢が描かれたヒューマンドラマとしても十分に読み応えがあるのだ。

しかも、岡嶋二人を語る中で行きがかり上、創作プロセスにも触れているのだが、これが尋常じゃなく分かりやすくするための。

相方の徳山氏と対話をしながらアイデアを出し合ったこと、さらにそのアイデアを転換する方法、プロットの練り方、実際の書き方、井上氏が書く技術を高めるために行ったことなどが、時系列を追いながら惜しげもなく書かれている。

ミステリやエンターテインメントの分野で小説を書いている人、または書きたいと思っている人にとっては、この部分だけでも一読の価値があろう。ただし、読み終えた後は創作意欲がぐつぐつと湧き上がってくる可能性が高いので、

そんなことしたくない、という方にはおすすりめはできない。

もう一つ、本書をおすすりめできない理由がある。

それは、あなたがミステリファンでまだ岡嶋二人の作品を読んでいない場合、具体的に作品名とその創作プロセスが書いてあるため、完全なネタバレになってしまうからだ。そういう方には他の岡嶋作品を楽しんだ上で「おかしな二人」を手にとって頂きたい。

僕自身、小説の創作をしており創作作法については幾つかの書籍を読んだが、

「おかしな二人」以上の指南書には未だ出会えていない。

今でも創作をする時には本書の内容が頭をよぎることが多い。

それは、本書に記されているのが実体験に基づくノウハウであり、

そこに栄光や挫折、葛藤までもが織り込まれた、血肉が通ったものであるからだ。

本書を読んでみると、プロ作家だから名作が生み出せるのではなく、

面白いものを妥協なく追求する姿勢が、岡嶋二人を人気作家の高みへ押し上げたことが分かる。

その姿勢は乱歩賞応募時代から全く変わっていないし、プロになってからも変わらない。

常に新しい刺激を求め、少しでもつまらないと感じたアイデアは容赦なく切り捨て、

迫りくる締切に消耗しながらも相方と衝突だってする。すべては納得できるものを作るために。

こういった作り手としての高いプロ意識と、創作への愛情が全編にわたって溢れているのだ。

本書は発行から15年以上の歳月を経てなお色褪せることなく、

むしろ、一億総発信者時代の今日において、より一層の輝きを持ちながら、

作り手としての矜持を思い起こさせてくれるのである。

もちろん、すべての情報が新鮮なものではない。

ジョン・レノンの死去、手書きの原稿用紙、パソコン通信黎明期...等の記述で、

ああ、もう今から何十年も前の話なんだっけと気づかされる。

なにしろ岡嶋二人が乱歩賞を受賞したのが1982年なのだ。

しかし驚くべきは、逆にそういった描写以外で古さを感じる部分がまるでないことだ。

それだけ、普遍的な物づくりへの真理が描かれているのだろう。

そんな本書だからこそ、行き詰った際には、つい手をのばし、

創作がはじまる瞬間の高揚感を味わったり、

そこに記されているプロ意識に襟を正したりしている。

きっと、これから先の人生で何度も読み返すだろう。

決して万人におすすりめはできないが、

書く人・書きたい人、物作りに関わる人にはおすすめしたい一冊だ。